



TITLE:

徂徠学の基礎的研究( Abstract\_要  
旨)

AUTHOR(S):

今中, 寛司

---

CITATION:

今中, 寛司. 徂徠学の基礎的研究. 京都大学, 1968, 文学博士

ISSUE DATE:

1968-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212962>

RIGHT:

【 4 】

氏 名	今 中 寛 司 いま なか かん し
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 32 号
学位授与の日付	昭 和 43 年 11 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	徂徠学の基礎的研究

論文調査委員 (主 査)  
教 授 小 葉 田 淳 教 授 赤 松 俊 秀 教 授 重 沢 俊 郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は序章および三章より成り、年表・索引を付する。序章では、明治以来の徂徠学研究史を述べ、徂徠学研究上の問題の所在を提示する。山路愛山・井上哲次郎は、徂徠学が朱子学の天人合一的自然法的形而上学であるに対して、経験主義的人間の独立を提唱したとして、最初にその歴史的位置付けを行ったが、山路は徂徠学を功利主義的政治学としたに対し、井上は特に徂徠の古文辞学の構造と方法論を紹介した。岩崎遵成の「徂徠研究」は、それまでの徂徠に関する研究を集大成したものであり、最近の丸山真男の業績は、朱子学の思想形態を連続的思惟、徂徠の復古学を神と自然と人間の分裂と規定し、人間の創造的主体を徂徠の作為・制作に求めている。

古学派の儒学は中国の儒学に対し、日本人として最初の本質的な理解即ち日本の儒学ともいうべきものを提示し、その朱子学に対する経験主義的立場よりの批判が、やがて日本の近代化へ連なる一役割を果たした。しかし徂徠学については、むしろ古文辞学の語学や文献研究の方法論、護国社が啓いた文詩社中の盛行が、大きな歴史的意義を持つようになった。

第一章では、宝永年間にいたるまで、徂徠学が形成される過程を述べる。徂徠は延宝7年から元禄3年まで、父方庵とともに南総の地に流謫同然の生活を送り、この間に儒書の読解と自学自習により訓詁学の基礎を築いた。元禄9年柳沢保明(吉保)に仕官し、華語・華音の研究に傾倒した。徂徠の古文辞学は、この華語・華音研究が直接に深い影響を及ぼしており、従来の徂徠の研究において、これが閑却されている点を著者は指摘する。宝永6年徂徠は柳沢藩邸を出て町儒者となり私塾護園が始まり、同年「護園随筆」の草定を見たことは、彼の生涯を画したものである。「護園随筆」では、仁斎学を朱子学の立場で批判しているが、内容は却って仁斎に接近し、徂徠独自の古文辞学・復古学の構想を、すでに備えたものである。古文辞学が宝永初年頃から明朝の復古文学者李攀龍・王世貞の詩文や文芸論の研究をはじめとし、先秦の文学より唐宋の文学の研究に及んで形成されたように、復古学も仁斎学の刺激をうけ仁斎学を越えて、中国の儒学史を渉猟し参照した結果として築かれた。徂徠の復古学の形成に特に影響を与えたものと

して、荀子・楊雄・張横渠等がある。宝永3年から同5年頃に成立した「読荀子」において、荀子の性悪には正面より接近せず、荀子の偽は人為であり自然より峻別される人文であるとし、さらに進んで気質不変化説を唱えて、気質の性の不可変を主張するにいたった。また孔子に始まり荀子にいたり完成したとされる正名の名辞論理学から、徂徠においては先王・後王成名説より時王制作説にまで展開した。徂徠学の特色として、先王の作為・制作という人為的人間主体性確立を余りに強調し拡大解釈することは妥当ではない。徂徠学の本質を限定するならば、復古学において気質不変化説、古文辞学において華語・華音の言語学に立つ言語文化論が、独自性を持つものといえよう。

第二章は徂徠学の成立と題して、徂徠の後半生の経歴、政治的・学問的生活を考述し、古文辞学・復古学の完成にいたる著作の内容を解説している。宝永6年將軍綱吉没して吉保が罷免され、徂徠は致仕して町儒者となりその後半生が始まるが、その後半生の詳細は従来特に不明な点が多かった。著者は主として「徂徠集」特にそのうちの書牘部を精密に考証して、徂徠の幕政への参与、訳社の創立と運営、著作の年代、或は徂徠の家庭・健康・結婚等の日常生活を明かにすることを務めた。

「辨道」、「辨名」は享保2年頃に成った徂徠学の主著ともいえるべき著作である。「辨道」は復古学説を体系的に述べた最初のものであり、「辨名」は物と名の関係を明かにし、道をはじめ徳・仁・智・聖・礼等より三十三条の名をあげて、古文辞学的解釈の下に古義を考証し、その上に徂徠の学説を展開した。物とは教の条件で六芸を指し、先王立つところの名は教の存するところであり、道はその名を総称した統名である。徂徠は道の本源を宋儒のように天に求めずして、ただ敬天畏命を説いている。それゆえ、天人鬼は自然と同様に不可思議なものであるが、徂徠は先王の制作した祭祀や儀礼の対象となるからその存在を認める。徂徠はまた人性は宋儒の性理ではなく、気質であるとして、気質不変化説を唱えた。「論語微」は徂徠の経解中の代表作である。徂徠は六経の本文は早く散逸し、孔子の時代には伝や記が、僅かに残っていたとし、論語は六経つまり先王の道を論定する論であり語であると結論している。「大学解」は先王が制作した庠・序・塾・宗の制即ち学校制度を記述した大学の解であり、「中庸解」は子思が老子に対抗して中庸を著わしたので、孔子の意は先王の制作した礼楽刑政を教えるにあるが、中庸は考悌忠信のような卑近な徳から出発することを説くとした。「孟子識」では孟子は論争の書であり、先王の道のため墨子学派よりの禦侮の役割を果たしたが、後世に先王の道を誤り伝える結果を残したと批判している。「太平策」は享保元年に黒田直邦の諮問に応えた時務策であり、「政談」は特に享保の政治を批判する形をとっている。「明律国字解」は將軍吉宗の公事方定書撰定に資した大明律の研究書であり、「詩文国字牘」は徂徠の漢詩文論を述べたものである。

第三章では徂徠学を思想史上より評価している。中国では朱子と同時代に、葉水心・陳龍川等の永嘉・永康学が朱子学に対抗して功利主義的思想を展開した。徂徠の制作・作為説は、葉・陳より発想されたい。徂徠の作為・制作は、作者は先王であり、いわば実定法として現われているが、先王は天命に従って礼を制作したものであるから、先王の道は自然法でもある。それ故、徂徠の作為・制作説は近代的な実定法思想と前近代的な自然法思想を含んでいた。徂徠の独自性の強い説には、先ず気質不変化説がある。宋学では性論に本然の性と気質の性の二元を立て、前者は永遠不易のものであるに対し、後者は人欲や環境によって前者をも疎外する。徂徠の性は気質だけで、気質は殊であってそれぞれに効用を持っている。

徂徠は気質の変化を否定したが、習をもって変化の原理とし、その変化も万殊つまり個性の範囲内に止まる。次に徂徠の新説は、時王の制の考えである。時王の制とは、その時の政權保持者が制定し実施する政策一般を意味しており、三代の礼もその時にあっては時王の制であるが、延いては現時の政治権力の絶体性をも認める。また徂徠の歴史観に文華史観があり、先王制作の礼楽は文であるが、これも久しい後には幣を生ずることを免れず、風俗奢移となり器量弱小となって衰亡するようになると述べている。

最後に著者は、徂徠学が日本の近世史の展開の上に、具体的に演じた役割を述べる。徂徠は荻原重秀の「幣は国家の造る所にして瓦礫を以てこれに代うと雖も而かも行わるべし」とする貨幣論を支持して、元文の貨幣改鑄は徂徠の意見に関連あるものと思われる。また先王の世は封建の世とする関係から、封建は儒教の徳治の依拠となり、これに対し郡県は法治の基本となるとして、封建社会を理想的とし、享保の政治へ協力する態度を示した。しかし他方に徂徠の主宰する護園には都市的市民的傾向が強く、それは徂徠の元禄時代への郷愁にも連るものであるが、それらが併存して徂徠学のうちにある矛盾は救い難いものがあった。

徂徠以後の考証学の展開は、却って徂徠学批判より興っている。徂徠学はむしろ国学に対し、言語学・文献学的の研究法において大きな影響を与えた。また徂徠の詩論は唐詩格調説を中心に盛唐詩模擬に終結したものといえるが、この詩風が護園の風潮となって一時代を風靡し、これにつづいて各地に文詩社が盛行した。かくて文芸の民間普及と市民の趣味的教養の向上に著しいものがあり、社中に醸成された市民的世界の拡大は、日本文化の近代化に貢献することになった。

### 論文審査の結果の要旨

荻生徂徠は日本儒学史上最大の儒学者の一人であるに拘らず、その業績の全般にわたって体系的研究が果されているとはいえず、またその経歴についても徹底した調査が行われていない。著者はこれらの欠を補うため、多年にわたる研究により本論文を成した。

本論文の成果として、ほぼ以下の諸点を挙げるものと思われる。(一) 徂徠の経歴、とくに従来不明な点が多かった彼の後半生の政治的、学問的生活および家庭、健康、結婚等の日常生活を精細に解明した。(二) 古文辞学、復古学の形成過程とその特質を、ひろく徂徠著作を吟味し、子細にその業績を検討して、究明した。気質不変化説・文華史観の独自性を強調し、制作・作為説の限界を指摘した点などはその例である。(三) 徂徠学が近世史の展開の上に持つ関連性を考査して、幾多の新鮮な見解を提示した。元禄・享保の政治に対する批判や協力、文詩社盛行の文化史的影響についての論などはその例である。なお、著者は中国の儒学を理解についても努力しているが、いささか、不充分と思われる点がないではない。これらについては著者の今後の精進を期待したい。しかし本論文によって徂徠学研究が大きく進められ、また徂徠学が日本思想史上に持つ意味が頗る明かとなった功績は顕著である。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。